

支援者もまた長い 試練の歲月へ

「東日本大震災」から3週間後、被害が集中した宮城県石巻市と周辺を訪ねた(4月2〜3日)。わずかに垣間見た「現場」にすぎないが、それでも被災者の窮状と支援活動の難しさを痛感した。

身元確認所で、病院で

石巻市だけで阪神大震災に匹敵する5千数百人の死者・行方不明者を数える。

旧青果市場の身元確認所では亡くなられた身元不明者の顔写真が掲示板に貼られ、一縷の望みを託した肉親や関係者が拝みながら凝視していた。苦悶の顔をそんな形で貼り出すほかないほど犠牲者は余りにも多すぎるのだ。

家も田畑も職場も激震と大津波に直撃され、避難者は2万人を超えた。

海岸沿いの市民病院は孤立し、ヘリコプターで患者、医療スタッフら約450人は5日ばかりで救出された。施設は使い物にならない。ライフラインが生き返った石巻赤十字病院が唯一の救急拠点になった。

3月28日から周辺の女川町や牡鹿半島を含め14エリアに分け、それぞれ担当の医療チームをやっと編成できた。各チームは避難所ごとの現状把握や患者、衰弱者の治療にあたる。全国の日赤病院はもろろん、九州、四国から北海道まで医師、看護師、薬剤師、事務職らが続々と駆け付けた。それでも朝夕のミーティングでは「いっただいてくれますか?」今日まで。開業医なので、来週の土日にまた来

ます」。そんな会話が交わされ、指揮者の同病院第1外科部長は「チームをいかに維持するか」と、綱渡りを強いられていた。

市内で、避難所で

漁船が道路に横たわり、商店街は全壊、半壊で寸断され、墓地にまで車が逆さに転がり、斜めに突き刺さる。その中を札幌市の救急車が走り、栃木県警のパトカーが警護にあたる。

自衛隊、米軍、ボランティアらがようやく瓦礫の山を道路側に押し出した避難所のひとつ、湊町小学校はなお水道も電気も下水も使用不能。4階建の本館に300人余が身を寄せせる。教室のコンクリート床に毛布を敷いて、1人1畳足らずでは折り重

なるように寝るほかない。
3階の「相談室」にも20人近くが入り、重度障害で胃ろうを造営し、タンの吸引も欠かせない14歳の少女もいた。大津波に追われ、近くの自宅から一家5人が必死で逃げ込んだ。「夫は、この子の車イスを引っ張って、もう、その背後で何人もが波に沈んでいった」と、妻は言う。



石巻市内の商店街に横たわる漁船

隣では老婦人がきちんと正座して、お皿に盛った御飯を1粒2粒、箸で黙々と口に運んでいる。僧侶の夫は大津波にさらわれた、という。
高台にある市営の体育館は、いわゆる「福祉避難所」(第2次避難所)にされた。
電気・水道・下水は健在で、ざっと130人余が寝泊りしていた。介護職らの支援部隊を集めて、石巻市民病院から脱出した内科部長が、こう指示した。

部長が、こう指示した。

「一般被災者は行く先、引き受け先を探し送り出す。それが、この避難所の役割です」。市役所に対し、介護、年金、生活保護などの担当者が各種資料を基に「身寄りを割り出せ」と申し入れたが、被災者を次々送り込むばかりで」と嘆いた。確かに要介護者も病人も混在状態では第1次避難所同様に感染症の蔓延が怖い。
診療所も訪問介護事業所も機能マヒに陥り、在宅の患者や要介護者は半ば放置されている。

「何ができるか」の自問自答を

誰が悪いのでもない。桁外れの大惨事が桁外れの支援を迫っているのだ。その支援も10年、20年の持続を求める。日本人と日本の社会全体が「何ができるのか」を考え、行動するほかない。

私たちのNPO法人(福祉フォーラム・ジャパン)でも、湊町小学校で寒さに耐えていた重度障害の少女へエアマット類や体調管理の酸素飽和度測定器を届けることから始めた。小さなNPOには大量の物的支援は不可能だが、個別の支援を細々でも続けたい。

避難所で母親が子どもに絵本を読んでもやる姿や、中学生が薄暗がりでもマンガ本を開いていた光景に何かホッとする思いがした。被災地の子どもたちへ500円の図書カードを贈る「ワンコイン募金」も始めた。NPOが存続する限り続ける覚悟だ。

■宮武 剛(みやたけ こと)

早稲田大学政経学部卒。毎日新聞社論説副委員長、埼玉県立大学教授を経て、現在、目白大学教授。
近刊に『現代の社会福祉 100の論点』(監修・共著、全国社会福祉協議会刊)。